〔書評〕

松本孝三著『北陸の民俗伝承　豊穣と笑いの時空』

山本　淳

本書は『北陸の民俗伝承　豊穣と笑いの時空』と題し、石川県など北陸地方を中心とした昔話や伝説、祭などの豊饒な伝承世界を著者松本孝三氏（以下、氏とする）自身が長年実践してきたフィールドワークの蓄積と豊富な資料に基づいて考察・紹介したものである。氏にとっては『民間説話〈伝承〉の研究』（三弥井書店、二〇〇七）に次ぐ二冊目の単著となる。前著では氏がそれまで取り組んできた伝承文学・民間説話研究を幅広い視野で集大成した内容・構成であったのに対し、本書ではその範囲・対象を「北陸」や「西行」のように絞って纏められている。では本書を纏めようとした氏の意図は何か。それは「あとがき」に端的に示されているのではないか。当該箇所を次に引用しておく。

わが国の悠久の歴史において、上層の動きだけではなく、その基層を構成し、民俗社会に生きた大多数の人々が創り出し、営々と受け継いで来た文化的地層の厚みこそが、実は一国の文化の総体なのであり、その豊かさを形づくっているということができる。それ故にこそ、ささやかにでも地域社会においてこういった研究の足跡をきちんと示して行かねばならないという思いが強い。そのことは、フィールドから多くを学んできた者に課された責務でもあるだろう。

本書の構成を目次より紹介すると、次の通りである。

はしがきにかえて
「そうろうべったり」の昔語り―中島すぎ媼の語り―
Ⅰ　昔語りの伝承世界
語り手の担う文化力―南加賀の昔話から見える世界―
声と語りが織りなす昔話の時空―異界との交錯―
「愚か村話」の語られた時代―「雲洞谷話」「在原話」「下田原話」を中心に―
若狭路の民間説話
Ⅱ　北陸の西行伝承
民俗社会の中の西行伝承―若狭・越前を中心に―
民間説話の中の西行―越中・加賀を中心に―

Ⅲ　加賀・能登のまつりをたずねて
　加賀の竹割り祭・グズ焼き祭
　能登・富来のくじり祭
Ⅳ　昔話資料
　中島すぎ媼の昔話（選）

続いて各章について簡単な要約を試みてみる。

まず序章に相当する「はしがきにかえて」であるが、氏が石川県江沼郡山中町（現、加賀市）でのフィールドワークで出会った語り手、中島すぎ（以下、敬称略）の紹介で始めている。彼女から数多くの昔話を聞いた感動を「実感」（四頁。以下引用頁数は本書のもの）として感じ、彼女の伝承の系譜・機会に触れ、昔話の大きな特色である結末句や昔話を語る時期について民俗学的見地からの解釈をすることで、彼女の語りの普遍性と価値について述べる。そして昔話のような口頭伝承は「子どもたちの情操に与えてきた本質的な意義と意味をさまざまな角度から再確認していく必要がある」（九～一〇頁）と結論づけている。

次に「Ⅰ　昔語りの伝承世界」では、主に石川県、福井県、滋賀県の昔話・民間神話・伝説を紹介しながら、特質・伝播者の問題・伝承者の心意などを多角的に分析している。

第一章は、氏の「昔話研究の原点」（一四頁）である中島すぎ宅と彼女の生活していた集落が現在では消滅していることを紹介し、「一人の語り手の命が失われればその図書館が消滅するのと同じように、一つの村が消滅するということは、その土地が数百年あるいは一千年以上も培ってきた生活文化が消滅するという」（一五頁）厳しい現状を示す。そして昔話は「声」を伴うことで過去の記憶を次代に伝えていく機能を有すること、また南加賀に伝承されている本格昔話の話例の分析を始めお伽草子との関連（昔話「瓜姫小女郎」と『瓜子姫物語』）や、芸能との関連（昔話「蛇聟入（水乞型）」と文弥人形浄瑠璃『大職冠』）から、「昔話伝承の広がりと奥行き」（三五頁）を示している。さらに笑話「おちらしの話」「おちょんに杓文字」を基にして性的な内容が豊穣の予祝に繋がること、そしてこのような笑話の伝播には民間宗教者（説教僧・客僧）や文学者（連歌師・俳諧師など）が大きく関与していたという推測を示している。

第二章は、前半部では日本の民俗世界の中での声や語りの働きは特定の場・語り口・語り手によっていることを様々な民俗事例を基に紹介している。後半部では「異界」と向き合うために百物語のような怪談話や艶笑譚がいかに機能しているかを説明し、こうした口頭伝承の一端を連歌師・俳諧師・狂歌師が担っていたのではと推測している。

第三章は、笑話の一つである「愚か村話」について、雲洞谷（現、滋賀県高島市朽木村）と在原（現、高島市マキノ町）の話例を地理的背景から考察し、次に下田原（現、石川県白山市）の話例を地理的・宗教的背景から考察している。そして山中の集落を愚か村と規定して笑う集落もまた、都市部（ここでは京都な

ど）から「愚か村」と見做されていた可能性を指摘する。一方、「愚か村」とされた集落も見下す側を狡知・頓知でやり込めることで「反骨精神を発揮」（一三四頁）していたとし、吉四六話のような狡知譚の萌芽をみている。

第四章は、福井県の若狭・美浜地方の民間神話・笑話・伝説を紹介している。民間神話は、いずれも梗概化したものであるがそこから神・およびその末裔たる大男による国土創世、津波による集落の滅亡と再生を伝える内容であることを掬い取っている。笑話は、「豆こ話」を例に大らかな「性的な笑い」が豊穣への予祝となっていることを紹介している。伝説は、弘法大師が訪れる弘法来訪伝説を取り上げ、訪れた地域ごとの「対応とその因果」（一六一頁）および生業にまつわる伝承として捉えていく。民間神話・笑話・伝説のいずれも、単なる過去の出来事・作り話などではなく現在の実際の生活にも根ざしたものであるという認識で一貫しており、氏の民間説話に対する姿勢の一端が現れている。

「Ⅱ　北陸の西行伝承」では、全国に広がる西行伝承のうち、北陸地方に地域を限定して考証している。しかし地域を限定してはいるが、深く掘り下げることによって普遍的な事象が掘り出される結果となっている。

第一章・第二章はそれぞれ、若狭・越前、越中・加賀を対象とし当該地域の西行伝承の特徴およびそれが生成した地域的要因について考察している。氏は、西行が旅の途中で立ち寄った土地の者との歌の詠み合いに負けて退散するという形式の様々な伝説を口承・書承の中から丹念に拾い上げていく。それらの伝説から、「土地の精霊との関わり」（一七〇頁）が原像にあると推測し、崇徳院の霊を鎮める西行の行為の意味にも拡げていく。そして、伝説を担い伝えてきた働きを連歌師・俳諧師・狂歌師・説教僧といった文化人のネットワークとその活動に求めている。いずれも西行という著名な歌人の伝説には「歌の力・歌の呪力」（一九三頁）を信じそれを行使する意識が確かにあり、それが近世期の文化人（各地を廻る者と在地の者の双方）にも底通するのだとする。一方で各地を遍歴する文化人の活動だけではなく、在地の文化人の活動を句集や地誌などの史料から読み解き伝説の生成・伝播の場を復原していく。それは第二章の末尾を「『文化としての西行』の担い手として、北陸の文化高揚に大いに貢献したといえる。」（二二五頁）と結んでいることから分かるように、伝説などの民間説話は民間説話、俳諧などの文芸は文芸と安易に区別するのではなく、両者を総体的に「文化」として捉えるべきであるという氏の研究に対する理念と意志によるものであろう。

「Ⅲ　加賀・能登のまつりをたずねて」は、「民俗探訪」（三〇三頁）の体裁で石川県に伝わる祭の見聞を基点として全国の民俗・信仰・民間説話について考察を進める未発表の論考を二編まとめている。

第一章は、石川県加賀市菅生石部神社で二月に行われる「竹割り祭」と同市の振橋神社で八月に行われる「グズ焼き祭」を紹介している。前者は大綱を大蛇に、後者は作り物を怪魚にそれぞれ

見立て退治する祭である。氏はこれらを、フィールドワークで聞き取った伝説、加賀市に伝わる民謡、そして京都市左京区の鞍馬寺竹切り会式と比較することで「五穀豊穣の祈願」（二四〇頁）の祭だったとする。

第二章は、八月下旬に石川県羽咋郡富来町（現、志賀町）で行われる八朔祭を紹介している。同祭は通称「くじり祭」と呼ばれ、町内をキリコと呼ばれる奉灯を掲げて練り歩くという。氏はこの通称に注目し、方言「くじる」の意味・八幡神社の祭でもあること・由来に漂着神の伝承がみられることなどから八幡信仰の古い姿を見出している。また、奄美大島に類似の伝説があることを示し、海浜に生活する人々の信仰の拡がりを想定している。

「Ⅳ　昔話資料」は、「〔昔話資料〕中島すぎ媼の昔話（選）」と題し、氏らの編著である『南加賀の昔話』（三弥井書店、一九七九）刊行以降に採録した昔話資料を八話紹介している（『南加賀の昔話』からの再掲を含む）。話は「桃太郎」「蛇聟入（水乞型）〈イ〉・〈ロ〉」「鳥呑爺」「舌切雀」「団子浄土」「玉取姫」「女房の口」という広く知られた話柄であるが一話当たりの分量が多く、豊かな語りの一端を感じさせるものとなっている。

以上、乱暴ではあるが各章の要約を試みてみた。先述したように氏は本書で、北陸地方を中心としたフィールドの中で、中島すぎの語り・西行伝説・笑話のように対象を絞っている。例話も、西行の失敗譚や愚か村話、性的な内容を伴う笑話と「笑い」に因むものが多い。本書名の副題に「豊饒と笑いの時空」とあるように笑いによって豊かで平穏な暮らしを希求する民俗心意の発露を、氏は民間説話や祭に見出している。またこうした民間説話を創出し伝播していく存在についても目を向けていく。具体的には連歌師・俳諧師・狂歌師や説教僧といった文化人の交流や移動といった活動である。特に、現地の文化人がいかなる人々とネットワークを構築していたかを近世期の文献から丹念に拾い明らかにしていく。そしてその土地に民間説話が根付いていく様態を通して、地方において「在地の文化」（一九四頁）を創出する営為を見出していく。書承と口承を峻別するのではなく、相互関係の中で文化が形成されることを明らかにしたのが本書だといえよう。勿論それは、丹念な現地踏査からしか見えてはこない。民俗・風習・生活・歴史を総体的に捉えようとする氏のフィールドワーカーとしての実績による成果である。北陸という特定の地域を掘り下げることが安易な地域礼賛に陥るのではなく、日本の普遍的な民俗世界を浮かび上がらせている。が、それは氏が広い視野と深い蓄積を有しているからこそ可能であるといえる。専門書であるが本書の文体・論述は平易（講座での講演を基にしている章もある）であり、民俗学、特に民間説話に関心を持つ学徒は研究の面白さに触れ、啓発される内容である。また文学研究を志す者にとっても「文学とは何か」を考える上でも益すること大であろう。

最後に一点。本書の導入部分で印象的に繰り返される言葉について述べたい。それは「はしがきにかえて」の「子ども（たち）」という語と第一部第一章冒頭の「すべてが途絶えてしまう」

「何ひとつ残っていない」等の記述である。これらの言葉から、先に引用した「あとがき」と併せ読むことで、原点に立ち返り現在の消滅を受け止めつつも未来に文化を託そうという氏の固く強い意志を感じるのは筆者の深読みであろうか。本書の取り上げる範囲・対象が「北陸」「西行」などであることは、冒頭で指摘した。「北陸」は氏の故郷（石川県金沢市出身）であり、また「西行」は氏の研究の出発点（『撰集抄』）にして花部英雄氏（國學院大学）や小林幸夫氏（東海学園大学）らと共に取り組んできたライフワークの一つである。こうした穿った解釈はともかく、本書は氏の、温かく真摯な対象への眼差しに溢れている。回数こそ少ないが筆者は、奄美大島や石垣島といった南島、佐渡、そして宮城や岩手、青森と各地で探訪・調査をする氏に同行した経験がある。丹念に自身の足で歩き、風景を見つめ、人の語りに耳を傾けていた氏の姿は、まさに本書と重なりあうものであった。優れたフィールドワーカーとしての氏に教え導かれ、先輩のその背中を追っていきたいと後輩として改めて思う。ただ、筆者の力量不足のため本書を十分に紹介することが出来なかった。深くお詫びする次第である。

（三弥井書店、三〇六頁、二〇一六年二月、本体価格二七〇〇円）

（やまもと・じゅん　本学非常勤講師）